様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６０８

研究課題名（和文）民間説話に見るアフリカ中・西部の心性分析と語りの教育効果の検証

研究課題名（英文）An Analysis of Central and West African Folktales as a Means of Understanding Central and West African Values and as a Tool for Foreign Language Learning

研究代表者
永井　敦子（NAGAI, Atsuko）

上智大学・文学部・教授

研究者番号：５０２１７９４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：西・中央アフリカの民話と日本の民話の比較研究においては、親子の情といった普遍的と言える価値観を反映した共通点と同時に、狡猾な行動の容認、他人の幸運や幸福に対するある種の無関心等の相違点を見出した。またヤウスの受容美学を発展的に利用することで、こうした相違点、日本人の読者が抱く「違和感」の理由を、過去の読書体験等によって読者の意識に生まれる期待の地平が乱れる現象によって、説明できることを示した。アフリカの民話を教材とした語学・文学教育、アフリカの学生によるネット接続による指導を組み込んだ学習については、その語学教育と異文化理解の両面での高い効果を検証することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　他文化の読者がアフリカの民話を読んだときに感じる違和感の理由を、受容美学の理論を発展させて説明することで、差別や排除といった優劣の意識を含む言説ではない、相互に平等な異文化理解に資する理論的モデルを提出することができた。
　研究対象地域を含む諸地域の研究者との継続的な共同研究や国際学会の主催を通じて、大陸横断的な共同研究を継続的に実行する際の作業分担や資金調達面での今後の課題を認識すると同時に、様々な文化的背景の人を受け手として意識する研究を実践できた。アフリカの民話を大学でのフランス語学習や文学的なテクスト分析の教材とすることの、異文化理解としての教育効果を検証することができた。

研究成果の概要（英文）：When reading folktales from Central and West Africa, Japanese readers are often surprised when they encounter moral and life lessons that are very different from these thought in Japanese folktales. To analyze and explain the cause of this surprise, I apply a phenomenological theory about reading proposed by Hans Robert Jauss. He propose that reader's surprise comes from unmet expectations which result especially in their memory about similar stories. I also used folktales from Central and West Africa to promote learning of French and intercultural understanding of students . I discussed how collaboration with West and African students via the internet can further this learning and I proved validity of exchanges between Japanese students and foreign students about a intercultural topic by presentation and report by students.

研究分野：フランス文学

キーワード：アフリカ文学　民話

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで 20 世紀、とりわけ 1920 年代から 60 年代のフランスのシュルレアリスム運動から生まれた詩、サルトルの文学批評、マルローの美術論などを通じて、フランスの作家がアフリカやカリブ海の旧植民地の造形や詩を評価する理由を考察してきたが、そのなかでそうした諸地域の詩の根底にある世界観、自然観、人生観自体を理解する必要を感じた。

また申請者は日本でフランス語やフランス文学を教える者として、日本との経済交流が今後益々増えることが予想される当該地域の歴史や文化に対する日本の若者の理解や関心を深めるためにも、フランス語圏アフリカ地域の文化や文学を学ぶ機会を増やしたいと考えてきた。そして民話や神話は、その地域の人々の世界観や人生観を学ぶための格好の素材と考えるにいたった。

さらに数年前から学術交流を行なっているアフリカ地域やフランスの研究者と、彼らが指導している学生との繋がりを利用した共同研究や教育活動を通して、アフリカ民話の研究を推進することの有効性を感じた。また故江口一久国立民族学博物館名誉教授がカメルーン北部他で採取した民間説話の録音カセットテープ 1500 本あまりの引き取り手がないため、それらをカメルーンの大学図書館に遺贈したいという相談を、同教授が日本で展開されていた「地球おはなし村」で活動されていた方々より受けたため、その音源資料の日本と当該地域での研究･教育活動への利用方法を､自らの研究を介して探る必要を感じた。

２．研究の目的

本研究では、西アフリカ、中央アフリカのフランス語圏の民話や伝説、神話を主たる分析対象とし、そこに見られる自然観、世界観、人生観についての理解を深め、特に日本の文化、文学に見られるそれらとの比較分析を行うことを第一の目的とした。

さらにその分析を教育活動に取り入れ、当該地域の文化や文学に対する学生の理解を深めること、加えてアフリカやフランスの研究者や学生との研究交流活動を通じて、両地域の相互理解と文化資源の充実を実現することを目的とした。

３．研究の方法

以下の方法で研究を行なった。

I.　民話や神話に見る自然観や世界観、人生観の理解については、江口教授が採録された資料のほか、フランス語や日本語で出版されている書物および研究書をもとに分析を行なった。日本の民話や神話との比較については、主題やモチーフの比較だけでなく、現象学に基盤を置くヤウスの受容美学の概念を利用し、特に日本の民話に慣れ親しんだ日本人が当該地域の民話や神話を読むときに、どのような点に違和感を抱くかといった視点からも検討した。

II.　研究対象地域の研究者による研究指導や、彼らとの意見交換を重視した。シンポジウムでの交流だけでなく、共同研究に継続性を持たせるための工夫をした。また研究を進めるなかで、民話や神話の伝承の民族学的、社会学的、歴史的背景に関する理解を深める必要を感じたため、17 年度にはカメルーンの中央アフリカカトリック大学マリ＝テレーズ・メンゲ氏を招聘し、本テーマとの関連では講演「アフリカの若者たちは今–農村部からの人口流出と家族の絆の維持」と、公開セミナー「カメルーンの民間説話に見るアフリカの心性」を、さらにルカ・ルサラ上智大学客員教授（コンゴ）による「争いごとの解決をめぐるアフリカの知恵、説話・説教・ことわざの解釈」を開催した。また継続的共同研究のひとつのまとめとして、18 年度にはフランス、パリのセーヴル学院を会場とした国際シンポジウム「民話を通じたアフリカの知恵–紛争解決の鍵」を開催し、メンゲ氏を含む中央アフリカカトリック大学教授 2 名、上智大学の協定校であるアンジェ大学（フランス）の教授 1 名、申請者ほか合計 5 名による個人発表と討論により、同一テーマに関する文学、言語学、哲学、宗教学、民族学ということなるジャンルからの分析を持ち寄った議論により理解を深めた。さらに国立民族学博物館の飯田卓准教授よりご紹介いただき、同博物館が客員教授として招聘し、江口教授の音源資料の学術的分析と整理を分担しておられるカメルーンのマルア大学教授のウスマン・アダマ氏より音源資料の歴史的分析についてお話しをうかがった。

III.　江口教授の音源資料については、同教授が所属されていた国立民族学博物館にてデジタル化されたうえ、整理、保存、利用されることになったので、本研究を開始する時点で課題としていたデジタル化は行なっていない。しかしこの件でアドバイスをいただいたパスカル・コルドレックス国立図書館音源課長からは、本研究に関わる資料や研究機関についてのアドバイスを継続的にいただいている。また江口教授の音源採取の一部はトーゴのダンベルマで行われているため、トーゴ大使館に出向き、江口教授の仕事を紹介した。現在トーゴ大使代理はじめ在日トーゴ大使館の方々が、トーゴ博物館をはじめとする研究・教育機関における民話研究専門家の有無について調査をしてくださっている。

Ⅳ．アフリカの民話とその語りの教育への導入とその効果の検証については、上智大学フランス文学科の選択必修講義「文献演習」において、訳読やテクスト分析の教材として利用するだけでなく、朗読や演技の実践を取り入れ、視覚のみならず聴覚や身体を通して受容、表現することを学生とともに学んだ。またその成果を、上智大学「アフリカウィーク」内のイベントとして公開した。またそれらの練習においては、上智大学の協定校であるコートジボワールの CERAP の大学部長フランソワ・カボレ氏の協力のもと先方大学の学生にスカイプでテクスト理解、発音、イントネーションの指導をしてもらった。　またアフリカの民話や児童文学という、日本の学生にはなじみの薄いジャンルについての理解を深めるため、17 年度にはアフリカの児童文学の研究家村田はるせ氏、18 年度には日本におけるアフリカ児童文学翻訳の第一人者さくまゆみこ氏に講演をしていただいた。

４．研究成果

主として以下の成果が得られた。

Ⅰ.アフリカの民話分析からは、主として下記の雑誌論文２本を執筆した。

西・中央アフリカの民話と日本の民話の比較研究においては、親子の情といった普遍的と言える価値観を反映した共通点と同時に、狡猾な行動の容認などの相違点を見出した。またこうした相違点、日本人がアフリカ民話を読んだときにしばしば感じる「違和感」の由来を検討し、一定の解答を導き出した。またその「違和感」の説明が、差別や排除をもたらしかねない優劣の価値観が入り込んだ言説ではなく、相互に平等な異文化理解となるための理論的モデルを提出することができた。

Ⅱ.研究対象地域をはじめとする諸地域の研究者との共同研究を重ね、自分の意見を説明し感想を求めることで、日本人だけでない様々な文化的背景の人を意識しながら研究することができた。またそれらの研究者を日本に招聘したり、客員教授として来日中の研究者と研究交流を行うことで、申請者の研究を、それらの研究者によりよく理解してもらうことができた。こうした関係構築は、今後の共同研究の継続にも大いに資すると考えている。

さらに共同研究のひとつのまとめとして、パリ（フランス）で国際学会を開催し、80 名余りの参加者を得た。特に民話の内容の倫理的側面などについて、活発な質問や意見交換がなされ、今後も継続的に共同研究を行う意義が確認された。同時に研究活動における作業分担や資金調達の問題などが課題として浮かび上がったが、こうした課題が浮かび上がったこと自体も、今回の試みの成果と考えている。

Ⅲ.今回の活動は、江口教授の長年の研究活動の成果のひとつである音源資料がしかるべき形で国立民族学博物館に保存され、将来の研究者の役に立つ可能性をひらくための、ひとつのきっかけとなったと考えている。

Ⅳ．対象学生にアンケートをし、効果の検証をしたところ、「民話の朗読や演技がフランス語の学習に役立った」、「アフリカの民話はほとんど知らなかったので新鮮だった」など概ね好評だった。またすでに２年ほどコートジボワールの学生とのメールによる文通を続けている学生も複数おり、学生による西アフリカと日本の相互理解の役に立つことができた。以上のことから、一定の教育的効果は得られたと考えている。また村田氏、さくま氏両氏の講演では、児童文学の内容だけでなく、アフリカにおける児童文学の出版事情や読書事情に関する理解も深めることができ、作品の受容を検討することの重要性を理解することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）

1) 永井敦子、「アフリカの民話に学ぶ」、『改革者』（政策研究フォーラム）、676 号、50−51 頁、2016 年 11 月 1 日。査読無。

2) 永井敦子、「乱される「期待の地平」−サハラ以南の民話への異文化からのアプローチ−」、『上智大学仏語・仏文学論集』（上智大学フランス文学科）、53 号、79−89 頁、2018 年 3 月 10 日。査読無。

〔学会発表〕（計　1　件）

1) Atsuko NAGAI, Horizon d’attente troublé: l’accès interculturel aux contes africains, *le Colloque international La Sagesse africaine à travers les contes: un outil de résolution des coflits*, au Centre Sèvres, Paris, France, le 2 novembre 2018.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。